

タイトル	高楠順次郎博士の古社寺調査 財団法人「啓明会」の補助による高山寺経蔵の調査
著者	徳永, 良次; TOKUNAGA, Yoshitsugu
引用	北海学園大学人文論集(77): 72(一)-53(二〇)
発行日	2024-08-31

高楠順次郎博士の古社寺調査

財団法人「啓明会」の補助による高山寺経蔵の調査

徳 永 良 次

一 はじめに

本稿は、京都高山寺の収蔵庫に保管されていた、高楠順次郎博士による「法鼓臺聖教目録」の発見を機に、『大正新脩大藏經』の校合本としての高山寺本の役割、また、古社寺調査の実態について明らかにしていくことを目的とする。しかし、高楠順次郎博士の事績のすべて、さらには『大正新脩大藏經』の編纂事業の実態をすべて説明することは不可能である。そこで、当面、1、高楠順次郎博士の古社寺調査の実態、2、その資金源となった財団法人「啓明会」の概要、3、「啓明会事業報告書」からみる高楠順次郎博士の古社寺図書の調査、4、高山寺に

現存する「法鼓臺聖教目録」と具体的な調査の痕跡、の4点について検討していく。

二 高楠順次郎博士の古社寺調査と

『大正新脩大藏經』の関わり

『大正新脩大藏經』の出版は仏教史上において、従来の大藏經類をしのぐ偉業であり、その後の仏教研究には欠かせない基本資料となっている。大正十三年の刊行開始以降、ほぼ毎月のペースで出版を続けており、印刷出版を継続していくこと自体が相当な困難な状況にあったようである。^(注1) その驚異的な刊行ペースもあってか、校訂に

はいくつもの問題点が指摘されており、校合に用いたとされる日本の古写本・刊本についても追跡調査が完了しているとは言い難い。刊行が開始されてから約十年余、昭和九年に全百巻が出版され、その間ほぼ毎月のように刊行がつけられるなど、現代であつても極めて驚異的なペースであると言える。高麗版の大藏經を底本に、増上寺等の大藏經、正倉院の天平古写經、「その他わが国名刹諸山に珍藏される未刊の仏書を収蔵し」^(注2)、校合に注力したとされるが、一致しない部分も多いとされ、その実態は未だに未解明と言つて良い状態である。

この中で、古社寺所藏の經典の調査については、「大正二年から凡そ十カ年、啓明会の後援を得て、毎年、春・夏・冬の休暇をもつて、東寺、大通寺、青蓮院、高山寺、仁和寺、石山寺等所藏の古書の調査に従事された」^(注3)とされているが、後述するように、財団法人「啓明会」は大正七年の設立であるので、右の記述とは一致しない。高楠順次郎博士による古社寺調査の実態については、次のような記述がある。

(二)

「先生が古刹の山坊に赴いて聖教の調査に取りかかられて凡そ十年の歳月を毎夏(時には春や冬の休も利用された)それに費やされたが、いつも二三の助手が同行したのである。橋本進吉、大屋徳城、戸部隆吉、中野義照、長谷部隆諦、蓮沢成淳^(つぐみ)、干潟竜祥、近藤隆晃、逸見梅栄、山田竜城、塚原順英などがそれである。(中略)毎朝五時に起床し、六時には調査のため書庫に入られた。助手も同様で、六時から十二時まで一分の休みもなかった。一時間昼食のために宿房に帰るだけで、午後一時から六時までにはまた書庫の調査である。六時に宿房に帰られると入浴や食事があり、これが終ると、午後八時から十一時過ぎまで「仏教全書」の校正または執筆にあてられる。こうした五十日が続くのである」^(注4)

『大正新脩大藏經』の編纂事業と高楠順次郎博士が「凡そ十年」の長期間にわたつて近畿地方の寺院經藏の調査と目録作製を実施したことは、これらの後輩たちの残した記述からも疑いようもないことであるが、その実態や規模、成果としての目録やその痕跡については未だ明らかになっていない。筆者が調査に従事している京都梶尾

高山寺については、「傳承によると、大正の末頃に、高楠順次郎博士が調査された」程度^(注5)のことが知られるのみであつた。

三 啓明会について

このように実態が不明確な古社寺圖書の調査であるが、その有力な資金源となつた「財団法人啓明会」（以下、啓明会と略称する）の発行した事業報告書から、高楠順次郎博士による活動内容を見ていくこととする。

啓明会とはどのような組織でその活動記録や成果はどのようなものであるかについては現状、多くを知ることができない。与那原恵は、啓明会とその設立に大きく関与したとされる、赤星鉄馬と赤星家についてまとめて^(注6)いる。以下、これを参考・引用しつつ啓明会について、特に本稿に関わる部分について概略を示していく。

「啓明会は、実業家の赤星鉄馬（明治十六年生まれ）が百万円（現在の貨幣価値で約二十億円）を寄付して、大正七年に設立された。（与那原126頁）」

役員には、啓明会第一回事業報告書によれば、顧問に牧野伸顕、理事として、理事長平山成信ほか六名、評議員は新渡戸稲造ほか十五名（理事含む）、ほか委員一名という本格的な組織体制であつた。莫大な寄付をした赤星家は「財団の設立者にならないばかりか、役員にもくわらず、研究事業の決定に一切関与しない方針を貫いた」（同127頁）という。『啓明』は、知識を広め、物事を明らかにするという意味のほか、明けの明星の意味もあり、赤星家への謝意をこめた命名である」（同128頁）と推定しているが、そのことを示す資料は残っていない。第一回の事業報告書の末尾に「附録」として、啓明会の活動方針が掲載されることが知られるのみである。以下、重要部分を掲げる。

第一章 総則

第一條 男爵牧野伸顕平山成信ハ赤星鉄馬ノ寄附ニ係ル金壹百萬圓ヲ以テ財団法人ヲ設立ス

第二條 本財団法人ハ啓明会ト称ス

第三條 本会ハ公益ニ資スル為メ左ノ事業ヲ行フヲ以

テ目的トス

一 特殊ノ研究、調査、著作ヲ助成シ及発明
発見ヲ奨励スルコト

(以下、省略)

この事業目的に沿って、啓明会は「人文系・社会系・自然科学系と多岐にわたり、文学・法学・理学・工学・医学・芸術など先駆的な研究を助成しつつ」、「とりわけ基礎的な文献や史資料の収集、編纂に力をそそぎ、その後の研究の礎となったものが多数ある。」(同126頁)という。

啓明会は、大正七年の設立から昭和初期の戦時色が色濃くなるまでが、その活動の最盛期であり、戦後も規模を縮小しながら活動を続けていたが、平成二十二になつて資産三百万円を東京大学に寄贈して九十二年間に及んだ組織は解散したという。

四 事業報告書の翻刻と概要説明

(四)

さて、啓明会の事業報告書は、第一回から少なくとも第二十五回までは発行されているようである。第二十五回の発行は昭和十九年であるので、まさに戦争のただ中までは発行していたのであろう。ただし、これらの現物を所蔵している図書館が極端に少なく、国立国会図書館のデータベースにデジタル資料があるのは、第一回から第二十回(昭和十四年)までである。高楠順次郎博士に関わる活動内容が啓明会事業報告書から知られるのは、以下に掲げる第十四回までであるので、これらについて、高楠順次郎博士の古社寺調査に関して、どのように報告しているかについて紹介しつつ、ポイントを整理していくこととする。

以下、引用にあたっては、「啓明会事業報告書」ごとに、高楠順次郎やそのグループに関する情報および古社寺調査の実態に関わる部分のみとし、毎回同じ内容が掲載されている部分については、必要に応じて省略していく。また、漢字は原則として通行の字体に改める。

大正七・八年度 第一回事業報告書

財團法人啓明會第壹回大正七・八年度事業報告書

一、古社寺所藏圖書ノ調査

（住所省略） 文学博士 高楠順次郎

五ヶ年間ニ金五千圓ノ補助

古社寺所藏圖書ノ調査ハ東京帝大文学部教授高楠順次郎氏ノ申込ニシテ、同氏が数年來春夏冬ノ休業ヲ利用シテ、高野奈良京都等ノ古社寺所藏ノ圖書ニ付調査ヲ遂ケ目録ヲ作製セラレシ事業ヲ更ニ繼續完成セントスルモノニシテ、五名ノ補佐員ト共ニ今後滿五ヶ年間休業日ヲ利用シテ、上記古社寺所藏ノ圖書ヲ一々閲読シテ、年代明ナルモノハ之ヲ年代順ニ、然ラサルモノモ一定ノ順序ニ之ヲ列記シテ、其ノ目録ヲ作製シ、又仏學上、梵語學上、文明史上其他一般的重要ナリト認ムル事項ハ之カ拔萃ヲ為スト共ニ、其ノ卷頭ノ部分又ハ重要ナル部分ヲ写真ニ撮ラントスルモノニシテ、本會ハ其經費トシテ金五千圓ヲ補助スルコト、セリ。本邦ニ於テハ多数ノ古社寺アリテ古來ノ珍書ヲ藏スルモノモ少カラス、殊ニ奈良京都高

野等ノ寺院ニ於テ然リトシ、我國ノ歴史ハ勿論宗教、文学芸術其他ニ於ケル屈強ノ資料ニ乏シカラス。然レトモ多クハ単ニ其ノ書庫ニ死藏スルノミニシテ、其ノ整理行届カサルノミナラス保存ノ方法モ完カラス、為メニ内部ノ僧侶スラモ其何書ヲ藏スルヤヲ知ラサルノ有様故、世間一般ノ之ヲ利用スルノ途ナキハ勿論ナリ。即チ所謂宝ヲ持腐トナリツ、アリ。之カ目録ヲ作製シ其内容ノ大要ヲ明ニスルヲ目的トスル高楠博士等ノ本事業ハ實ニ此ノ宝庫ヲ活用スルノ鍵タルモノト云フヘシ。而シテ同目録ハ調整出來次第之ヲ帝大圖書館ヘ寄贈シ以テ一般ノ利用ニ供スル筈ナリ。

この事業報告書の記述からは下記の点を指摘できる。

1 啓明会の補助による調査以前にすでに「高野奈良京都等ノ古社寺」の調査を開始しており、目録を作製していた。この段階では具体的な古社寺の名称は記載されていない。

2 その目的は、古社寺が所蔵している蔵書の日録を作製し、重要なものについては、卷頭あるいは重要部

分を写真撮影するという。これによって、「世間一般ノ之ヲ利用スル」ことができるとする。

3 高楠順次郎博士以外に五名の補佐員とあるが、その氏名は記されていない。

4 調査完了後には「帝大図書館へ寄贈」して一般の利用に供するつもりであった。

ちなみに、第一回啓明会の補助では他にも、次のような国語・国文学に関係する事業が採択されている。

六、仮名調査事業、大矢透、三ヶ年五千四百円

一〇、校本万葉集ノ整理及刊行、佐々木信綱、三ヶ年
壹萬四千元

大正九年度 第二回事業報告書

財団法人啓明會第貳回^{大正九年度}事業報告書

一、古社寺所蔵図書ノ調査

五ヶ年間二金五千圓ノ補助

(住所省略) 文学博士 高楠 順次郎

(六)

「略伝」高楠氏ハ慶応二年五月備後国御調郡八幡村深井観三氏ノ長男ニ生レ、後神戸氏高楠孫三郎氏ノ養嗣子ト為ラル。明治二十年西本願寺普通 교校ヲ卒業シ、二十一年英国牛津大学ニ入り、二十五年卒業シテ「パチエロル、オブ、アーツ」ヲ、越エテ二十七年「マスター、オブ、アーツ」ヲ受ケラル。二十五年来独国「キール」、伯林、萊府各大学ヲ卒業シテ「ドクトル、フイロソフイエー」ヲ受ケ、二十八年来仏国在学、三十年帰朝、東大講師トナリ、三十二年文科大学教授ニ進ミ言語学ヲ担任シ、尋テ梵文学担任トナル。一時東京外国語学校ヲ兼任セラレ、三十三年文学博士ヲ受ケ、四十五年帝国学士院会員ニ列セラル。尚三十七、八年在英中牛津大学ヨリ「ドクトル、オブ、リテラチュア」ノ学位ヲ受ケラル。

「事業」本調査ハ高楠博士カ数年来ノ事業ニシテ、大正八年三月以来本会ニ於テ之ヲ援助スルコトセリ。而シテ本年度末迄ニ同博士ヲ主任トシ外ニ橋本、大屋、長谷部、戸部、鳥越、中野、逸見、蓮澤、塚原ノ九補助員ニ依リ調査完了セルハ在京都下記三文庫ニシテ外ニ東寺観智院

金剛藏ハ調査中ナリ。(一)東寺宝菩提院三密藏、此文庫ハ平安朝ヨリ徳川時代ニ至ル各期ニ於ケル仏教殊ニ密教ニ関スル書籍及古文書ヲ包含スト雖、平安朝末期ニ於ケル密教小野廣沢十二流ノ伝本ニ至リテハ特殊ノ地位ヲ占ム。諸方面ヨリ見テ珍書ト称スヘキモノ聖教伝本ニ於テ凡三百種、悉曇伝本ニ於テ凡五十種アリ、醍醐寺ノ成賢勸修寺ノ興然両学匠ノ自筆ハ其数最多ク斯ル精確ナル証本ニ依テ古伝ヲ研究シ得ルハ他ニ其例ナカルヘシ、奇書ト称スヘキモノ亦多シト雖、伝教弘法両大師ト共ニ入唐シ般若三藏ノ訳場ノ首座トナリ心地観經ヲ訳出シタル奈良興福寺靈仙三藏ノ逸伝史料シテ最必要ナル竈壽「大元帥奏狀」(闕本)、明時代支那朝鮮ニ実用セラレタリト覺シキ「挿書梵語読本」(無題)ノ如キハ注目ニ値ス。(二)粟田青蓮院古水藏、此ノ文庫ハ平安中期以來各時代ニ於ケル各派ノ書籍ヲ包含シ今期調査ノ各藏中最モ古キ時代ヲ代表セルモノナリ。殊ニ台密ノ本系タル谷流ノ伝本ニ於テハ豊富精選ヲ極メ古相承凡四十函ハ悉ク此ノ部類ニ属シ皆珍書ト称シ得ヘシ、「超際仙人宿曜図」「唐梵両語隻対集」ノ如キハ他ニ比類ナキモノト謂フヘク、録外藏

書中ニモ亦注意スヘキモノアリ、「二九一宝函」ト称スルモノハ谷流ノ祖皇慶正伝ノ印信、伝書、目錄、貝葉梵本等ヲ藏シ古來勅封アリ代々門跡ト雖、年膺全カラサルモノハ開封ヲ許サレス其ノ内容ハ悉ク一門ノ重宝タルヘキ文書ナリ、「青蓮王府日記」ハ凡元禄時代ヨリ維新時代ニ至ル青蓮院門跡日々ノ記録ニシテ多クハ宮中府中市中ト往復贈答ノ記ナリト雖、徳川史料維新史料トシテ逸スヘカラサルモノナリ、寛永版「活字一切經」全部六千三百二十三卷ハ天海僧正印行後何人モ手ヲ触レサル如キ全本ヲ藏ス。(三)梅尾高山寺法鼓台、此文庫ハ鎌倉初期ヲ中心トシテ其ノ前後ノ筆写ニ係ル華嚴宗ノ書籍最豊富ヲ極ム、サレト一般仏教及密教ニ於テモ亦有数ノ文庫タルヲ失ハス、徳川末期ヨリ散逸甚シカリシト雖モ尚其ノ要部ヲ保存ス、明恵上人自筆「夢の記」「宋藏目錄」玄証上人自筆「梵天火羅供養図」ノ如キ殊ニ著眼スヘキ所トス、他ニ玄証上人ノ「持本」又ハ「写本」ノ記アル文書凡四十種アリ有力ナル美術史料ナリ。

第二回の「事業報告書」になって始めて高楠順次郎博

士の経歴が紹介されている。また、調査に関係する「補助員」が九名に増員され、しかも、名字が明らかにされているのも今回からとなっている。

この時に、調査完了したのは、(一) 東寺宝菩提院三密蔵、(二) 粟田青蓮院吉水蔵、(三) 梅尾高山寺法鼓台の三文庫とし、他に東寺観智院金剛蔵が調査中とする。この三文庫の調査と目録がこの時に完成したかについては触れていない。しかし、それぞれの文庫の特徴と重要資料についての簡単な紹介があることから、相当程度の調査が進行していると考えられる。

また、第二回になって始めて啓明会の設立が大正七年八月八日であることが、末尾附録部分に記載されている。

大正十年度 第三回事業報告書

財団法人啓明會第拾大正
三年度 事業報告書

一、事業

本会ハ大正七年八月ノ創立ニ係リ、研究、調査、著作、

(八)

發明及ヒ發見ヲ助成奨励スルコト、必要ナル講演、出版ヲ為スコト等(別記寄附行為第三條ニ詳記ス)ヲ目的トス。

(中略)

(二) 継続中ノ補助事業

一、古社寺所蔵圖書ノ調査

五ヶ年間ニ金五千圓ノ補助

(住所省略) 文学博士 高楠順次郎

「略伝」(同内容のため省略)

「事業」(前半は同文のため省略)(四) 東寺金剛蔵、此文庫ハ従来最豊富ナル宝蔵ノ一トシテ各方面ノ人士ニ依リ屢調査セラレタレトモ何レモ皆不完全ヲ免レサリシカ此度高楠氏等ノ調査ノ結果(其) 全蔵ヲ登録スルヲ得タルハ洵ニ欣幸トスル所ナリ。調査中新発見トシテ平安朝ヨリ南北朝ニ至ル梵本筆写二函、平安朝末ヨリ鎌倉ニ至ル仏教素描画家ノ作品一函等アリ。(五) 大通寺廻心蔵、同寺ハ京都下京東寺外ニ在リ六孫王神社ニ属セシ(旧)

寺ニシテ源頼朝夫人政子、実朝夫人阿仏尼ノ本願建立ニシテ殊ニ江州石山寺ト連絡アル寺院ナルヲ以テ藏書中殊ニ注意スヘキモノ多シ。（六）御室仁和寺塔中倉、此倉ニ於テハ藏書百三十一函全部ノ調査ヲ了セリ。別ニ御經藏ハ次期ノ調査ニ讓ル。（七）右ノ外江州三井寺ニ於テ智証大師將來梵本ヲ謄写シ、播州高砂十輪寺ニ於テ貝葉梵本ノ取調ヲ為セリ、何レモ有益ナル研究資料ナリトス。

第三回の事業報告書の冒頭に啓明会の補助事業の目的が始めて記載された。

さらに、この時期から、これまでの三文庫の調査に加え、東寺金剛藏、大通寺廻心藏、御室仁和寺塔中倉の三文庫の調査が追加され、東寺金剛藏、仁和寺塔中倉の調査は完了したことが知られる。御室仁和寺の御經藏調査は次期以降の調査とし、さらに、三井寺と高砂十輪寺で梵本の調査を行うなど非常に精力的な活動であった。

大正十一年度 第四回事業報告書

財團法人啓明會第四回大正拾壹年度事業報告書

（二）進行中ノ補助事業

一、古社寺所藏圖書ノ調査

五ヶ年間ニ金五千圓ノ補助

（住所省略） 文学博士 高楠順次郎

「略伝」（省略）

「事業」（前半省略）、而シテ本年度末迄ニ同博士ヲ主任トシ外ニ橋本、大屋、長谷部、戸部、鳥越、中野、逸見、蓮澤、塚原、藤田、大山、木下、口入田、國友、水原、田村、近藤、山田等ノ諸氏ニ依リ調査完了セルハ左ノ如シ（中略）（六）御室仁和寺塔中倉、藏書百三十一函全部ノ調査ヲ了セリ。別ニ御經藏藏書三十五函ノ調査ヲ終ル。（中略）（八）大通寺宝藏、全藏百六十余函ノ調査終了。（九）江州石山寺、經藏全部（但一切經ヲ除ク）、塔頭藏全部百三十函ノ調査ヲ了ル。同寺ハ藏書最モ精良ヲ極メ菅丞相ノ孫ニ当レル中興ノ祖師淳祐内供ノ筆写ニ係ルモノ最多ク何レモ珍書トス。

第三回までと異なる部分がある。ひとつは（二）「継続

中ノ補助事業」とあつた部分が「進行中」となつた。ふたつめに、「事業」の冒頭部分の調査補助員が「藤田、大山、木下、口入田、國友、水原、田村、近藤、山田等」となつて、さらに九名が追加されたことが変わつている。

古社寺調査については、この回になつて始めて石山寺の経蔵調査を実施していたことが突然表明された。しかも、「塔頭蔵全部百三十函」の調査が完了しているという。また、昨年度では継続中としていた仁和寺御経蔵を含め、概ね当初の目的とした寺院経蔵の調査が完了していることが伺える。しかし、依然として「進行中ノ補助事業」の部分に記載されている。

大正十二年度 第五回事業報告書

財團
法人 啓明會 第五回 大正
拾貳年度 事業報告書

(二) 進行中ノ補助事業

一、古社寺所蔵圖書ノ調査

五ヶ年間二金五千圓ノ補助

(住所省略) 文学博士 高 楠 順 次 郎

「略伝」(省略)

「事業」(前半ほぼ同文のため省略) 本年春迄二左ノ通り調査完了シ目下成績整理中ナリ。

(以下、同文のため省略)

第五回が補助事業の最終年度であるが、古社寺調査は完了しているものの、「目下成績整理中」という追記があり、進行中のままとなつている。「成績」が何を示すかについての具体的記述は見られない。

大正十三年度の事業報告書は発刊されていない。これは、大正十二年九月に起きた関東大震災の影響であろうと思われるが、それについての記述は見られない。

大正十四年度 第六回事業報告書、第九回事業報告書

財團
法人 啓明會 第六回 大正
拾肆年度 事業報告書

財團
法人 啓明會 第九回 昭和
二年度 事業報告書

「事業」については変化がないが、末尾「附表」に「補助事業成績一覧」という一覧形式の中に、「二、大正十三年度末迄ニ全部完成シテ目下印刷中ノモノ、略完成シテ整理中ノモノ、及一部完成シテ発表済ノモノ」という部分があり、次のように纏められている。年度によりや表記が異なるが内容は同一のため、第六回ものを省略して掲載する。

件名 古社寺所蔵図書ノ調査

担当者 高楠順次郎

摘要 前年度末迄ノ分 近畿所在拾余名利ノ拾数ヶ書庫

全部ニ付其蔵書ノ詳査了ル

本年度中ノ分 目下成績整理中

昭和三年度 第十回事業報告書

財團
法人 啓明會第拾回<sup>昭和
三年度</sup> 事業報告書

「略歴」末尾に以下の一文が追加された。

先年停年ヲ以テ東大教授ヲ勇退セラレ、現ニ同大名譽教授タリ。

「事業」については、第五回と同文。

昭和五年度 第十回事業報告書、第十三回事業報告書

財團
法人 啓明會第拾貳回<sup>昭和
五年度</sup> 事業報告書

財團
法人 啓明會第拾參回<sup>昭和
六年度</sup> 事業報告書

(二) 完成セル補助事業

(中略)

四二、古社寺所蔵図書ノ調査

五ヶ年間ニ金五千圓ノ補助

(住所省略) 文学博士 高楠順次郎

「事業」本調査ハ高楠博士多年ノ事業ニシテ、大正八年三月以來本会ニ於テ援助スルコトトセリ。而シテ同博士ヲ主任トシ外ニ橋本、大屋、長谷部、戸部、馬越、中野、逸見、蓮澤、塚原、藤田、大山、木下、口入田、國友、水原、田村、近藤、山田等ノ諸氏ニ依リ、大正十二年春

迄ニ調査完了シ、成績整理中ノ處昭和五年十二月左ノ如ク完成結了シタリ。(一) 粟田青蓮院「吉水藏目録」三卷(二) 御室「仁和寺御経藏目録」十一卷(三) 江州「石山寺深密藏目録」十四卷(四) 梅尾高山寺「法鼓臺聖教目録」二十二卷(五)「東寺金剛藏目録」四十七卷以上何レモ貴重ナル資料ナリ。

古社寺調査に関しては、右に記載した通り、大正十二度までにはすべて完了していたのであるが、その後長期間にわたつて「成績整理中」となり、ようやくこの時に五箇所の経藏目録が完成した。しかし、これ以外にも、東寺宝菩提院、仁和寺塔中倉や大通寺廻心藏なども調査は完了しているが、目録完成の報告は記載されていないままとなっている。

昭和七年度 第十四回事業報告書

財團法人 啓明會 第拾四回 昭和七年度 事業報告書

(二) 完成セル補助事業

四二、古社寺所蔵図書ノ調査 金五千圓ノ補助

(住所省略) 文学博士 高 楠 順 次 郎

補助決定ハ大正八年三月、事業完成ハ昭和五年十二月。成績ハ「吉水藏目録」三卷「仁和寺御経藏目録」十一卷「石山寺深密藏目録」十四卷「法鼓台聖教目録」二十二卷「東寺金剛藏目録」四十七卷ノ書写。

この「第拾四回事業報告書」以降、少なくとも管見に入つた「第貳拾回(昭和十三年度 事業報告書」までは全くの同文(高楠順次郎博士の住所が異なるのみ)となっている。

以上、啓明会事業報告書から知ることのできる、高楠順次郎の古社寺調査について示してきた。これらの事業報告書から知られる活動内容を整理していく。

① 高楠順次郎博士は、大正八年に啓明会から正式に補助を受ける以前から古社寺調査を行っていた。ただし、正確にはその調査がいつからどのような規模で行われていたのか、その目的や規模については明らかで

ない。

② 対象となった古社寺と図書の分量は、以下の通りである。

- 1 東寺宝菩提院三密藏
 - 2 青蓮院吉水藏
 - 3 高山寺法鼓臺
 - 4 東寺金剛藏
 - 5 大通寺廻心藏（百六十余函）
 - 6 仁和寺塔中倉（百三十一函）
 - 7 同 御経藏（三十五函）
 - 8 三井寺（梵本調査）
 - 9 十輪寺（貝葉梵本調査）
 - 10 石山寺経藏（一切経ヲ除ク、塔頭藏全部百三十函）
- ③ 昭和五年度事業報告書に、蔵書目録が完成したのは次の五箇所であり、東寺宝菩提院三密藏、大通寺廻心藏、仁和寺塔中倉の蔵書目録については（調査自体は完了している）不明である。
- （一）青蓮院吉水藏「吉水藏目録」三卷
- （二）御室「仁和寺御経蔵目録」十一卷

（三）江州「石山寺深密蔵目録」十四卷

（四）梅尾高山寺「法鼓臺聖教目録」二十二卷

（五）「東寺金剛蔵目録」四十七卷

④ 完成した蔵書目録の寄贈先などは触れていない。

⑤ 調査の補佐員として、当初五名としていたが、すぐに九名（補助員）に増員され、最終的には十八名以上となったようである。

五 高楠順次郎博士の高山寺経蔵調査

ここまで見てきたように、高楠順次郎博士による古社寺の図書調査は極めて大規模、かつ組織的なもので、しかも、それぞれの蔵書目録を整備するという点で画期的なものであった。しかしながら、その成果として、例えば、ほぼ同時期に進行していたとされる『大正新脩大蔵経』の校合資料として、どの寺院のどの資料がどの程度利用されていたかについては依然として不明な点が多い。そして、肝心の完成した五箇所の寺院における蔵書目録についてはほとんど知られないままであった。

しかし、近年、筆者が調査に従事している、梅尾高山寺の経蔵(収蔵庫)から、高楠順次郎博士が作製した蔵書目録「法鼓臺聖教目録」二十一冊の存在を確認することができた。この点については、すでに拙稿で概要を紹介している。^(注7)

この論考と、筆者が再度高山寺収蔵庫の原本調査した結果をもとに、調査が実施された年代順に整理し直し、さらに担当者の氏名も一覽して示す。掲載順は、「法鼓臺聖教目録」に記載された、調査の年月日順に並べ、以下、調査担当者、担当箇所(冊)とする。記載した年月日は、調査開始なのか終了時なのかは不明であるが、初回の(第五冊)に「始之」とあることから、調査開始時としておく。

大正八年

(第五冊) 大正八年八月一日始之 大屋徳城

法鼓臺聖教目録五

(第六冊) 大正八年八月一日 戸部隆吉

法鼓臺聖教目録六

(第二十一冊) 大正八、九、十六 高楠順次郎、中埜義照

法鼓臺聖教目録終

廿二

(内題) 法鼓臺聖教目録 廿二 止 石水院別置之部

大正九年

(第一冊) 大正九、七、廿六 高楠順次郎

法鼓臺聖教目録一

(第二冊) 大正九年七月廿六日 戸部隆吉

法鼓臺聖教目録二

(第三冊) 大正九、七、廿六 逸見梅栄

法鼓臺聖教目録三

(第四冊) 大正九年七月廿六日 塚原順英

法鼓臺聖教目録四

(第九冊) 大正九年七月三十一日 塚原順英

法鼓臺聖教目録九

(第十冊) 大正九、七、三一 蓮澤浄淳

法鼓臺聖教目録十

(第十二冊) 大正九年八月一日 戸部隆吉

法鼓臺聖教目録十二

（第十三冊） 大正九年八月四日 戸部隆吉

法鼓臺聖教目録十三

（第十四冊） 大正九、八、四 蓮澤浄淳

法鼓臺聖教目録十四

（第十五冊） 大正九年八月四日 塚原順英

法鼓臺聖教目録十五

（第十六冊） 大正九、八、六 蓮澤浄淳

法鼓臺聖教目録十六

（第十七冊） 大正九年八月七日 戸部隆吉

法鼓臺聖教目録十七

（第十八冊） 大正九、八、八 蓮澤浄淳

法鼓臺聖教目録十八

（第十九冊） 大正九年八月九日 塚原順英

法鼓臺聖教目録十九

（第二十冊） 大正九、八、十五 高楠順次郎

法鼓臺聖教目録二十

（内題） 法鼓臺聖教目録 廿

以上の他に、年月日の記載がない三冊がある。

（第七冊） 長谷部隆諦 法鼓臺聖教目録七

（第八冊） 橋本進吉 法鼓臺聖教目録八

（第十一冊） 逸見梅栄 法鼓臺聖教目録十一

これら三冊は、第二回啓明会事業報告書の記載に右の三名が見えることや、担当したであろう目録の連続性から見て、大正八年調査時のものとみて良い。

結局、高楠順次郎博士グループの高山寺経蔵調査は、大正八年八月から開始し、翌大正九年八月十五日以降の夏期に一応の完成をみたものと考えられるのである。担当者は大屋徳城は大正八年のみである（欠けている二十一冊を担当した可能性も残る）が、戸部隆吉、逸見梅栄、塚原順英、蓮澤浄淳、長谷部隆諦、橋本進吉の署名があり、合計八名でこの聖教目録を完成させている。これは、現在では考えられないほどの驚異的なスピードであると言える。

現在、高山寺に残る高楠順次郎博士の「法鼓臺聖教目録」は「二十一」となるはずの一冊を欠いており、その

作成年月日と担当者を知らなかった。ただし、現在の収蔵状況を基に作成された「高山寺典籍文書目録」と箱番号、典籍の配列などは一致しているので、それらを照合していけば内容はおおよそ推定できると考えられる。後考を期したい。

六 高山寺における調査の実態

最後に、現在の高山寺に所蔵する聖教箱の側面に残る、高楠順次郎博士が啓明会からの補助を受けて調査した痕跡のある画像を紹介する。

高山寺経蔵の聖教箱は、重要文化財指定のためなどで取り出された第一部から第三部のほかに、第四部として現在、二二〇箱以上の聖教箱があり、その中に典籍文書類が収納されている。経箱としては、もともと鎌倉時代から江戸時代にかけて作成されたものがあつた。さらに、新たに発見された典籍文書類や、それまでの経箱が破損したり、使用に耐えられないと判断されたものについては、昭和四十四年以降に新造した。^(注8)この新造の経箱

には、土蔵(旧経蔵)内の大型の唐櫃に収蔵されていた平安・鎌倉時代の典籍文書が「反故の類として一括された」^(注9)ものを収納したという。これら「未整理品は、伝承によると、大正の末頃に、高楠順次郎博士が調査された折」^(注10)のものであるという。

このような高山寺経蔵の近世以前に作製された聖教箱には、様々な墨書や貼り紙がある。奥田勲氏はすでにこの経箱に記された墨書の識語に着目し、「中世における一大総合図書館ともいふべき高山寺経蔵の形成と伝流を考え、」^(注11)ひいては「経蔵の歴史の変遷を解明する上で重要な役割を果たす」と指摘している。さらに、石塚晴通氏は、経箱の側面だけではなく、裏側や被せ蓋の上部や内側にあるすべての墨書を調査された。^(注12)

現在の経箱には、画像1に見られるように、墨書以外に多くの貼り紙があり、右側から

「第六七」

「昭和四十四年四月／整理了」

の貼り紙がある。ひとつめは、昭和二十九年に実施された文化財保護委員会による調査によるものと考えられ、



画像 1 高山寺経蔵第六七函側面

その隣は、昭和四十四年以降に実施された高山寺典籍文書綜合調査団による悉皆調査の際のものである。ところが、数は多くないが他にも貼り紙があり、六七箱には、「八葉蓮弁^{（注13）}」という、和紙に朱色で印刷（あるいは押印）した中心部に、「六七」という箱番号、下部に「大正 九 八 二」の墨書が見える。この日付はまさに高楠順次郎博士グループの二回目の調査と一致しており、調査完了の目印として担当者が貼付したものであろう。つまり、高山寺経蔵には、高楠順次郎博士による「法鼓臺聖教目録」の青焼き版が現存（一冊欠）するばかりか、経箱にはその際に調査を実施した痕跡と見られる貼り紙が残されているのである。これら経箱に残る貼り紙と墨書の両方を総合的に検討していくことで、近代における聖教調査の実態と、特に、高山寺においては従来不明であった、近現代の典籍文書類の保管と整理状況を説明する大きな糸口になると考えられる。

ただし、すべての経箱に「八葉蓮弁」の貼り紙とそこに記載された日付などの情報が残っているわけではなく、画像2のように、貼り紙の痕跡のみが残っているも



画像2 高山寺経蔵第一二三函側面

の、肝心の八葉蓮弁やそこに書き込まれていたであろう墨書がないものもある。あるいは、おそらく「八葉蓮弁」の貼り紙があったであろうと推定出来るものの、殆ど剥がれてしまっている経箱も多い。画像2はその典型例と言える。

(一八)

七 おわりに

以上、高楠順次郎博士による大正年間に行われた、古社寺図書の調査の概要を、主に啓明会事業報告書から整理してみた。さらに、この古社寺図書の調査の実態を知ることの出来る、現時点では数少ない、高山寺に現存する青焼き版の聖教目録の概要紹介と、それを裏付ける「八葉蓮弁」の貼り紙について紹介してきた。なお、近年の筆者を始めとする科学研究費の助成を受けたメンバーによる高山寺収蔵庫の調査の過程で、高楠順次郎博士の一連の古社寺図書の調査のほかに、『大正新脩大藏經』の編纂事業と深く関係すると思われる資料^(注14)も見つかっているが、これについては、別に機会を得て調査、検討を加え

ていく予定である。

本稿の取り扱う事項はあまりにも幅広く、かつ奥が深いことを改めて知ることとなった。また、高山寺経蔵の聖教箱全点についての、このような観点からの詳細な調査には至っていない。経箱にある貼り紙や墨書の全体像と、青焼きとして現存している高楠順次郎博士による「法鼓臺聖教目録」との対応の解明などについては、今後の課題としたい。

注

- (1) 鷹谷俊之『高楠順次郎先生伝』二十三年四月号、大空社、一九九三年、67頁
- (2) 鷹谷俊之「大正新脩大藏經と高楠博士」、大法輪四月号、一九五六年、32頁
- (3) 注1文献、44頁
- (4) 注1文献、44頁
- (5) 築島裕「高山寺経蔵典籍文書総合調査団の歩み——あとがきに代へて——」『高山寺経蔵典籍文書目録完結篇』、高山寺典籍文書総合調査団、汲古書院、二〇一九年、558頁
- (6) この部分における「啓明会」に関する記述の大部分は、

以下の論考に依拠し、適宜引用しつつ概要をまとめている。与那原恵「蓄財よりも趣味に生きる 昭和史を豪快に駆け抜けた一族。日本初の学術財団「啓明会」と赤星家（上編）、東京人、都市出版、二〇一三年

- (7) 徳永良次「高楠順次郎博士作成の『法鼓台聖教目録』紹介」、令和四年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、二〇二三年

- (8) 石塚晴通「高山寺経蔵現存経箱識語」『高山寺経蔵典籍文書目録完結篇』、高山寺典籍文書総合調査団、汲古書院、二〇一九年、288頁

- (9) 注5文献、558頁

- (10) 注5文献、558頁

- (11) 奥田勲「高山寺典籍の集積と伝来（一）——経函についての考察——」、宇都宮大学教育学部紀要第1部、第32号、一九八一年、34頁

- (12) 注8文献、283頁

- (13) 月本雅幸氏（東京大学名誉教授）ご教示による

- (14) 高楠順次郎博士、小野玄妙らの名前が見える記録が近年になって見出された。

付記

本稿をなすにあたって、画像の使用を許可いただきました高山寺御当局、田村執事長に感謝いたします。

また、高楠順次郎博士に関しては、「八葉蓮弁」の貼り紙の存在と啓明会事業報告書についてご教示いただきました、月本雅幸先生に御礼申し上げます。

なお、本稿は、2023年度～2025年度科学研究費基盤研究(C)「近世・近代における高山寺典籍の構成と伝承に関する実証的研究」(研究代表者、徳永良次、課題番号23k00558)による成果の一部である。